

## 万葉集と染色加工

わたしは万葉集を研究しているわけではありませんし、趣味として入れ込んでいることでもないのです。ちょっとかじって見ただけなのですが、そこには染料や染色加工に関連した歌がいくつもあることに気づきました。

これらの歌を読むと、染料のもとになる植物や繊維加工の情景がその時代の風物になっていたり、古代人の染色加工に関する思い入れのようなものも伝わってきたりして、大変興味深いものがあります。

ここではそれらの代表的な例を幾つか取り上げて紹介して見ます。

### ＜春過ぎて夏来たるらし白妙の衣干したり天の香具山 持統天皇＞

この歌の大意は「今年も春が過ぎて夏が来たんやね、（その証拠に）香具山に白い衣を沢山干してはるの見えるわ」というようなものではないでしょうか。小倉百人一首にも入っている有名な歌ですが、飛鳥の宮殿から遠く香具山を眺めて詠んだのだと思います。

「衣を干す」のは何のためか。これは漂白をしているのでしょうかね。

漂白していない綿や麻はいわゆる生成色をしていて白くありません。古代の人といえども白い服が欲しかったと思われれますので、漂白はどうしてもしなければならなかったのです。当時はもちろん漂白剤などはないので、素材を天日に干し、次に水で晒す、ということは何度も繰り返して少しずつ白くして行っただけなのです。

この歌の背景には、初夏になると晴天の日は紫外線も多くなってオゾンが発生し、活性酸素が生成して干した生地の中の夾雑物を分解する、分解した夾雑物を水で晒して流し除去する、これを繰り返して白くして行く、という繊維製品の漂白工程があると思うのです。

「衣」とあるものの、必ずしも縫製したウェアとは限らず、生地であった可能性も高いですが、もし縫製品なら最古の製品加工だったかも知れません。

### ＜茜さす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る 額田王＞

この歌を解釈しますと、「紫草が生えている標野へ行ったとき、そこであなたがわたしに向かって一生懸命に手を振るものだから、番人のおっちゃんにわたしたちは怪しいのではないかと思われそうでハラハラしたわよ」という感じです。

これは天智天皇が一族郎党を引き連れて蒲生野へ狩りに行ったときに詠まれた歌ということで、ここでの「君（あなた）」は大海人皇子を指しています。

額田王は天皇の妃ですから当然同行していますし、天皇の弟の大海人皇子も一緒でした。

彼女は天智天皇の妃になる前は大海人皇子の妃でしたから、話がややこしくなります。「野守」というのは天智天皇を指しているという説もあるのです。

この行事は「狩り」といっても鳥獣を狩るものではなく、薬草狩りだったということ

です。紫草など有用植物を取りに野原へ出かけた、という行楽なのでした。

「標野」とは「メ野」、すなわち「関係者以外立入禁止」の野原のことです。ここには大切な紫色の染料の原料となる紫草が生えていました。ここが自生の群落か栽培していたのかはわかりませんが、いずれにせよ番人を置いてコントロールしていたのです。紫草は根に色素がありこれを煎じるなどして抽出し、植物を燃やして出来た灰の液で処理した木綿などの繊維を浸して紫色に染めました。



写真1 紫草

紫草の根にある色素は「シコニン」というポリフェノールで、金属と配位して水溶性の錯塩を形成します。植物の灰で処理するのは、灰の中の金属を繊維に付与するという「媒染」を行っていたのでした。

「シコニン」という名称は、紫草の色素の化学構造を同定したのが日本人化学者だったので、紫根のなかにある色素、という意味で命名されたのです。

この歌の冒頭にある「茜さす」という語句は、「紫」を導き出す「枕詞（まくらことば）」といわれるもので、歌の中では意味を持つものではありません。「紫」の他に「日」、「昼」、「照る」などにも掛ります。

もともと「茜」とは根から赤の染料を抽出できる植物の名前です。根が赤いので「赤根」→「あかね」→「茜」と名前が変遷したということは容易に想像できるところです。茜には大別して「日本茜」と「西洋茜」とがあります。色素の化学成分は日本茜では「パープリン」、西洋茜では「アリザリン」と呼ばれるものですが、どちらもアンスラキノンの誘導体で、水素三つが水酸基で置換されるとパープリン、二つだとアリザリンなのです。

これらはやはりポリフェノールで、媒染することによって発色・固着させます。ツバキの葉を焼いて作成した灰を使うと鮮やかな赤色が得られるといわれています。これはツバキの葉のなかに多く含まれる金属成分のアルミニウムの作用によるもの、ということです。



写真2 茜（西洋茜）

染色浴中に茜を投入すると（茜差す）→染色液がぱっと赤くなる→太陽を連想→「日」、「昼」、「照る」を導き出すことばとして使用されるようになった、「紫」を導くのは太陽からの連想とは異なって、色の類似によるものである、というふうに素人のわたしは考えています。ちょっとこじつけのようですね。また正式の学説がどうなのかも知りません。

しかし「山」という言葉にかかる枕詞「あしびきの」は次のようにしてできたといわれています。

＜山越えのためなどで山を歩くと足が疲れ、最悪の場合痛めてしまって足を引きずって歩かなければならないので、「山を歩くと足を曳く」→「足曳きの山」→「あしびきの」が「山」という言葉を導き出すようになった＞

そうだとすると、枕詞「茜さす」成立の素人仮説も似たようなものだと思います。

紫の染色といえば、こんな歌もあります。

### ＜紫は灰指すものぞ海石榴市の八十のちまたに逢へる児や誰 詠み人知らず＞

この歌の意味は、「紫染めをするときは灰を入れるのですよ、それもツバキの葉を焼いて作った灰をね、ところでツバキといえば海石榴市のにぎやかな路上で出会った可愛い娘は誰なのだろう」という感じのものでしょう。

「海石榴市（つばいち）」とは、現在の奈良県桜井市にあった交易の場で、「つばいち」の他「つばきいち」とも「つばきち」とも呼ばれていました。また「八十（やそ）のちまた」は、「道が多く枝分かれした繁華な場所」のような意味だと思います。

「紫は灰指すものぞ」の部分はツバキを導き出す「序詞（じょことば）」といわれるものです。本来は歌の中で意味を持つものではなく、ここでは「海石榴市の・・・」以下が本当に言いたいことなのでしょう。

しかしその序詞に、染色の手法に関することを使用しているのが興味深いです。

作者は「詠み人知らず」ということで誰だかわからないのですが、可愛い女の子に興味を持っていることから、若い男性だと考えられます。また、染色関連の序詞から、その業界の人だろうということもわかります。染色技術者見習、というところでしょうか。「みなさんをご存知ないでしょうけれど、こんな風にするものなんですよ」と誇らしげに言っているようです。

紫染めは大陸から伝わってきた当時の最先端技術で、染色の仕事に携わっている誇りがこういう歌を詠ませたものと思えてなりません。

しかし、そんな先端的技術である染色レシピを、ズバリ詠ってしまって大丈夫だったのでしょうか。後で親方から「あほんだら、ノウハウばらしてしもたらあかんやんけ」などとドツかれはしなかったか、他人事ながら心配になります。

### ＜紅は移ろふものぞ橡の馴れにし衣になほ若かめやも 大伴家持＞

歌の大意は次のようなものでしょう。「紅（くれなゐ）で染めた衣服はきれいだけど色が褪せやすいよ、橡（つるばみ）で染め、着用・洗濯を繰り返して着馴らした衣服より優れているわけがない」。

「紅（くれなゐ）」とは「くれのゐる」すなわち「呉の藍」です。藍はインディゴの藍ですが、染料全般を示す言葉でもあったので、「呉の染料」すなわち「大陸から渡来した染料」の意味で赤い色であっても「くれなゐ」と呼び、「紅」の字を当てたのです。紅染めには紅花のはなびらから抽出した色素を使用します。



写真3 紅花

紅花の色は写真のようにオレンジ色ですが、これは紅の色素カルタミンの他にサフロミンと呼ばれる黄色の色素が含まれているからです。

サフロミンは水溶性なので、最初にはなびらを水に漬けて溶かし出してしまいます（これを黄色の染料として使うこともあるようです）。

残った紅色の色素カルタミンはアルカリ性になると水に溶けるようになります。アルカリ性の水で抽出した染液に被染物を入れ、色素を吸着させてから酸を加えてpHを下げると、繊維上で再び水に不溶性となり固着できるのです。

こうして得られた染色物は鮮明できれいな紅色を呈していますが、それだけに耐光堅牢度が良くないのだと思います。家持はそのところを指摘したのでしょうか。

一方の「橡」とはクヌギの団栗のことで、皮から抽出した色素で媒染剤を使用して染めます。色目は媒染剤の種類によって、薄茶色からセピア色くらいのもものらしいです。この色素の化学成分がどのようなものかわかりませんが、媒染をするところを見るとポリフェノールの一種ではないか、と思います。

この橡染色物は地味な色なので、洗濯を繰り返していると色も落ち着いてきて変化しにくくなります。色目が色目なので汚れも目立ちにくく、普段着などには好適だったのでしょうか。そういう性質を取り上げて、紅花染めより橡染めが優れている、と家持は詠ったのです。

ところで、この歌は上記の大意以外に寓意も含んでいると言われています。派手な色の紅を遊女に、地味な色の橡を家庭を守る妻にたとえていると言うのです。寓意としての意味はつぎのようなものでしょうか。「フーズクの女にもてたとって調子に乗るんじゃないぞ、連中は金の切れ目が縁の切れ目で、すぐに離れて行く。それに引き替え、家にいる糟糠の妻は地味だけどいつまでも愛情を保っていてくれる、それに優るものはあろうか」。

以上代表例として四首の歌を上げましたが、他にも沢山あると思います。このように、古代のひとびとは美しい色の衣服を着ることについて歌に詠むほど強い関心を持っていました。これはもちろん（歌は詠まないにせよ）現代でも同じですし、将来も変わらないでしょう。

わたしは、母校で学んだ知識をもとにして、ひとびとが強く望む美しい色の衣服を創り出すこの技術―染色加工―に携わることができたのは幸いなことであった、と感じています。

この稿を作成するにあたり、次の書物を参照しました。

- ・伊原 昭「万葉の色―その背景をさぐる」笠間書院（1989）
- ・増井幸夫他「植物染めのサイエンス―万葉の色を化学する」裳華房（2007）

（色染 昭40・田中興一）